

「子どもは親の背中を見て育つ」

—— 初等教育についての提言 ——

真 野 義 人

前の経団連会長で、いま注目の行政改革を推進されておられる土光敏夫さんという大物の財界人がいます。この方は財界の人には珍しく金銭欲や名誉欲にこだわらない人で、私生活も質素、メザンが何よりも大好物というので有名です。収入のほとんどを自分の経営する橘学苑という学校に投ぜられて、次代の人物を育てることに生き甲斐を感じておられます。

画一的な教育は危険

この方が最近「日本への直言」というタイトルで、東京新聞に語られているのを拝見しましたら、教育というのは教師だけの問題ではないとこんな風についておられます。(6月13、14、15日朝刊)

「親が子どものしつけまで学校でやってください、なんていうのは頼りすぎですよ。しつけなんて、先生に頼むんじゃなくて、本来、親がきちんとやるべきもんなんです。」それに「子どもというのは親や家族の様子を見ながら育つんだから」「ボクは陽一郎(長男・現石川島播磨重工業取締役)なん

か、怒鳴ったりはしなかったよ。ボクのことを「怒号」さんなどという人がいるもんだから、いつも怒鳴ってばかりいるように思うかもしれないが、そんなことはない。職場ではよくカミナリを落としたがね。しかしそれは製品を納める以上、すぐ故障するようなものを作っては申しわけないから厳しく言っただけだ。要するに目標があって怒鳴ったんだよ」「しかし子どもたちには怒鳴らなかった。あるがままの自分、親の姿というものを見ていれば小言など言わなくてもわかりますよ。子どもは」

こんな風にはつきりおっしやっております。また、こうもいわれています。

「いま、夕方過ぎから夜まで塾通いしている子どもをよく見かけるが、あんなことをしては、子どもらしい遊びもできないじゃないか。ボクらのころは、まあ勉強をやらなかったわけじゃないが、ガキ大将でよく遊んだもんだよ。裏庭のツバキの木に登ろうとして落っこちてヒザ小僧をすりむいたりね。しょっちゅうだったよ。そういう生活はいまの子にはないやね。勉強するのはいいけれど、ただ記憶させたり、知識を詰め込むだけではダメだ。考える練習をさせなきゃあ。頭脳というものは発達するんだから。詰め込みでなくて、創造する力をつけなくては」「画一主義で、いい学校、いい会社だけを目指す風潮は間違ってもやせんか。大事なことは「いい子ども」を育てることなんだよ。将来、社会人として立派にやっけてゆける、そういう人間を育てることです」

土光さんは、子どもの小さい時から親がこうせい、ああせいと事細かに指導することに反対なんです。押しつけがいけないといっておられます。そんなことをすれば、本来子どもが持っている個性がなくなって、創造的に考え、行動することができなくなるばかりでなく、何でも他人に依存して自立できなくなってしまうと考えられています。

土光さんは、旧制の公立中学(岡山中学)の入学試験に三度も落っこちて、私立中学(関西中学)にはいったのですが、その中学を卒業、蔵前高工(現東京工大)にはいるのにも一度失敗、また浪人をしております。とくに秀才というわけではなかったようです。浪人中は母校の小学校で代用教員をやっ

て翌年やっとな蔵前高工へはいるのですが、この経験から人間はくじけてはダメだ、と説いてもおられます。「試験に落ちた、アルバイトをしたというと、苦勞の連続みたいと思うかもしれないがそんなことは決してない。結構楽しく、充実した日々だった」と思い出されています。失敗しても決してくじけない心身を保つことが何よりも大切だ、というわけです。「昨今は、一流大学にはいれなければ、という親の志向が強くなっているが、どの大学を出るかなんてたいした問題じゃないよ。どんな個人的な人材が育つかが大事なんだよ。受験戦争に巻き込まれて、当落に一喜一憂することはない。(長い人生から見れば)一回ぐらい落ちようがなにしようが、同じだよ」と受験競争を戒められております。

土光さんばかりでなく、画一的で規格的な入学制度や学校教育には反対する識者は非常に多いのです。文部省が全国的に統一した教育制度や教育課程を細目にわたって決めており、学校でも進学指導にあたって偏差値うんぬんといった考え方をとっていることにつきましては、問題は多いと思います。とくにこの偏差値という言葉は、もともと製造業において大量にモノを作るさいの基準概念として、人間の教育にあてはまる物差しではありません。偏差とは、標準となる数値、位置、方向などからずれている度数の分布をいうのにすぎず、生徒の成績の規格とすべきかどうか、はなはだ問題でありましょう。人間はさまざまな能力、あるいは性格をそれぞれ持っており、標準化はできません。まして進学する学校を決めるさい、この偏差を絶対視するのはどう考えてもオカシイ。それでは一体何を基準として教育の指導をしたらいいか、と教育の現場から質問も出るでしょうが、基礎的で初歩的段階ならばともかく、かなり進んだ段階では現在の偏差値というのは少なくとも問題にもなりません。

イギリスで女性として初めて首相になったマーガレット・サッチャー夫人は、アイアン・レディー(鉄の夫人)といわれるだけあって、実に明確にこんな風についております。1975年初めて保守党の党首に選ばれた直後の記者会見で「女性の党首として自分をどう考えておられますか」という新聞記者

の質問に対して「国民は個性を持った人間でなくてはなりません。人間はすべて不平等です。私は他の人とは違います。国民一人一人がみな個性を持ち、他とは違っているのです。これは大きな幸せです」と。人間は、男女もすべて平等だというありきたりのセリフを予想した記者たちに対して、これをパラドキシカルに答えるサッチャー首相はしたたかというか、その信念の一端を伝えるエピソードです。それはまた一つの真実を鋭く表現しているともいえましょう。

イレブン・プラス制度の教訓

しかし、そのイギリスで、実は全国的に子どもを一定のパターンにあてはめて学校を分けるという制度が作られて長らく物議をかもしたことがあります。イレブン・プラス (Eleven Plus) という制度で、1944年 (The Butler Act) に採用されあまりに問題がありすぎるということで結局 1976年に廃止されましたが (一部ではまだ実施中)、教育関係者にとって他山の石として参考とすべき試みでした。このイレブン・プラスというのは、初等教育が終了する11才の時点で、子どもをどんなタイプの公立中等学校 (Secondary School) へ進学させるかを定める試験で、子どもの適性を判断するものでした。この試験の結果、基本的なパターンとしてまず語学、社会、芸術など文科的な才能のある子どもは Grammar School、数学や理科などの才能が認められる子どもは Secondary Modern School、技術や実業に向くタイプの子どもは Secondary Technical School へ、と三つの方向を決めました。判定にあたっては、①先天的な知能テスト②英語と算数の能力テスト③小学校での成績と教師の報告記録④ボーダーラインの子どもには面接、という四つの結果をみて総合的に行なわれました。一面からみれば子どもの適性をみて進学させるわけですから合理的でしかも科学的な考え方といえます。

ところが、この制度が導入された当初からごうごうたる議論が全国的に湧き上がり、次第に反対論が強くなってゆきました。いくつもの疑問が出され

ました。まず第一の疑問は、子どもの能力と可能性が10才か11才ぐらいで一体評価できるのだろうか、ということです。子どもの成長は人によって違っており、このテストで人生の方向を決めるのはオカシイという議論です。第二の疑問は、前記四つの成績自体についての信頼性です。例えば、知能テストといっても、子どもは環境によって影響をうけるもので、教養があり教育に関心が高い親を持つ子どもは、あまり教養の低い家庭の子どもと比べて有利である、という証拠が出されました。また残る三つの効果についてもあまりあてにならぬ、という報告もなされました。教師の報告書はあまりにも教師の個人的評価に依存しすぎるし、面接もまた子どもの能力について一時的な印象をしるすにすぎない、というのでした。しかも第三に、この制度の最も大きい欠点にあげられたのは、親がこのテストの結果に期待をかけすぎて子どもに精神的負担をかけるということと、子どもの将来はイレブン・プラスで良い成績をとるかどうかにかかる、というように考えてしまうということでした。

実際にこの制度が適用されてからイギリスでは数多くの追跡調査が行なわれましたが、その結果かなりの問題があることが分かりました。この試験によって語学や社会に適性があるとして Grammar School へ選ばれた20人の子どものうち6~7人はこのタイプの教育に全く適していないことが判明したりなどしております。このためにイギリスの教育当局は60年代になって、以上三つのタイプの中等学校のほかに、三つのタイプに分けない総合中等学校 (Comprehensive School) を作り、これまでの三つのタイプの学校を吸収するようになりました。そして地方によってはイレブン・プラスとは別個の選抜方法を実施するようになりましたが、結局それもうまくゆかずついに1976年この制度が廃止されるということになってしまったのです。この最も直接的な背景になったのは、中等学校の総合化に進むにつれて、公立中等学校の人気は退潮して私立中等学校、とくに Public School ブームが起きて Grammar School が Public School に次第に切りかわってしまったことです。

イレブン・プラスの基本的パターンとした三つのタイプの学校のうち、Grammar School というのは、古くからの伝統を保つ有名学校が多く、しかも一流大学への進学率も高く優秀な人材が輩出している学校が大部分でした。そのために親も教師も何とかイレブン・プラスで良い成績をとらせて Grammar School へ子どもを進学させることを望んできました。ところが、これが Comprehensive School へ改編させられると、期待した教育がうけられないと親は不満を持ち、また Grammar School の教師たちも教育の Grade down を恐れて、結局、有名 Grammar School はどしどし私立学校、つまり Public School へ変身をとげてゆきました。60年代には200余の Public School が70年代になると500校になるという激増ぶりです。

パブリック・スクールの特色

さて、この Public School ですが、イギリス独得のもので少しくわしく説明させていただきます。Public School というのは日本語にすると公立学校のようにとれますが、私立の中等学校で、もともと貴族、門閥にとられず学費さえ払うことができる子弟ならばだれでも入学できる学校という意味で使われ、財政的にも独立しております。19世紀にはほとんどの Public School の基礎ができて、イギリスのエリートを輩出させてきました。なかでも古い有名校は、創設順に並べますと、まず Winchester (1394年) ついで Eton (1440年) St. Paul's (1509年) Shrewsbury (1552年) Westminster (1561年) Merchant Taylors (1561年) Rugby (1567年) Harrow (1571年) Charterhouse (1611年) といった学校です。Eton は政治家を出し、Harrow は軍人を出し、Winchester は学者を輩出するということが有名です。これらの学校も時代によって若干の盛衰がありますが、現在の Eton の名声は20世紀初めからトップにあげられてきております。Westminster の全盛期は17世紀、Rugby は19世紀初期、Harrow は19世紀末から全盛期といわれています。これらの学校からは Oxford 大学や Cambridge 大学へ大部分が進学し、イギリスの Establishment の根幹を作りあげました。イギリ

スでも親や教師は、優秀な子どもはぜひこうしたエリート校へ進学させ、出世を望みます。一見合理的にみえたイレブン・プラスの制度は Public School への進学熱によって押し流されてしまったのです。

しかしこの Public School の教育はたしかに優れている面も多いことは事実です。前記のように Public School は中等学校としましたが、日本流でいうと（公立の Secondary School と同様に、）中学校と高等学校を合わせた学校です。ここでは知育だけに主眼を置いていないのが大きな特色とされています。基本的に「健全な精神は健全な肉体にやどる」という考え方なのです。決して知育偏重ではないのです。人間に靈魂、知力、身体の三要素があり、真に人間的な教育とは、道徳や宗教、知性の修養のみならず肉体の鍛練をもかね備えたものでなければならぬとしております。日本でいう「よく学び、よく遊べ」と同趣旨のことをイギリスでは「All work and no play makes Jack a dull boy」（勉強ばかりで遊ばせないと子どもはダメになる）というわけで、どの Public School でも週に2回程度は正規の授業時に体育の時間が組みこまれ、またこれとは別に週に2日（たいていは水曜と土曜）の午後をスポーツにあてています。体育としては、冬にはラグビーやサッカー、夏にはクリケット、ホッケーというのが普通です。この他にテニス、乗馬や水泳なども行なわれております。とくにラグビー、サッカー、クリケットの三種のスポーツは、ビクトリア時代に Public School の改革が行なわれて、教育の場にとりあげられたもので、Public School で始められたのです。

この Public School では、スポーツは肉体の鍛練のみならず、道徳の向上と涵養に役立つと考えられてきています。スポーツの目的は身体ばかりでなく、精神的なもの、忍耐力、公平心、協調心、愛校心などの道徳的な資質を涵養する、とされています。クリケットというと日本ではあまり知られておりませんが、イギリスでは非常に人気があって、クリケット競技に使う用語が、道徳的な意味に用いられることが多くあります。例えば「注意深くふるまえ」という場合の表現として、「keep your eye on the ball」といい、「フ

「子どもは親の背中を見て育つ」

フェアにゆけ」という場合には「play a straight」といいます。クリケットという競技を生み育てた Public School の教育者たちが心に抱いたのは、まさしくこのような道徳的理想でありました。

この道徳というのは、前に述べました土光さんのいう「しつけ」よりももう少し広い概念でして、こころの持ち方というか、人生観というか、そういうものです。単なる社会訓練よりも深い意味を持っております。Public School では修身とか道徳といった授業はありませんが、体育・スポーツの時間にこれを教えて心身の健全をはかっているわけです。これはイギリスでは子どもの時から道徳教育を家庭で行なうのが当然であるという前提があるからです。学校ではこの教育をスポーツによって補強しているのです。親や家族は子どもの時からきちんとしつけをし、正しい心の持ち方や人生に対する態度を教えるのです。紳士淑女の教育は学校教育だけでは無理であり、基本的に親の責任によって子どもを教え、励まし、叱り、正しい人生を送らせるようにしなければならぬ、と考える人が多いのです。親がいい加減な生活を送っているのは、子どもをしつけようと思ってもできるわけではなく、それだけに親や家族の姿勢が大切だ、というわけでしょう。

利己主義の一般的風潮

この辺でイギリスの教育から日本の話題に戻りますが、戦後の若者の傾向として最近のジャーナリズムではこんな風にいわれております。まず50年代から60年代にかけては、既存の考え方や体制に対してこれを打破しようとする過激派の時代で、安保騒動や学園紛争はその象徴的な事件だった。そして70年代は、若い世代の革新運動が大きなカベにぶつかって一転してしらの時代となり、活気を失って何事にも関心を寄せず、ノンポリを決めこむようになった。80年代になって、こんどは全く自分中心の時代に転じて、若者は自分にとってトクかソクか、でしかモノを見なくなった。自分に直接関係がないことは一切無視して、他人とのかかわりについて自分だけしか考えない時代になった。こういうのですが、確かにそうした面が目立ってきました。

この傾向は別に若い人たちだけに限らず、一般的風潮として拡がりつつあります。利己主義です。自分さえ良ければ他人はどうなっても知らないという考え方は、Social Animal としての人間存在を否定するものです。社会の退廃といってもよいと思います。ギスギスしてきました。精神的道徳的価値観はどんどん衰退し、物質的金銭的欲望だけが肥大化してきました。

さきごろ、モラロジーの瑞浪社会教育センターで聞いた二つの実話をご紹介します。自分の子ども可愛さのあまりとはいえ、怖い話を聞きました。ある中学生の母親が3学期の試験の直前、子どもに良くできるお友だちを誘って一緒に勉強したらどうですか、と自宅で勉強会を催させました。勉強が始まるとこの母親はみんなにジュースをサービスしたのですが、自分の子どもを除いて友だちたちのグラスに睡眠薬を入れたのです。何も知らずに睡眠薬入りのジュースを飲んだ友だちは、もちろん寝こんでしまいました。母親は自分の子どもにいいました。「みんなが寝ている間にうんと勉強なさいよ」と。実際の話ということですが、中学校の成績が高校入学の内申書になるので他の子どもの成績を落とそうと考えたのでした。

もう一つの実例は、あるスーパーマーケットの店員さんの話です。そのスーパーに若い母親が4、5才の男の子どもを連れてきていたのですが、店員さんはその男の子が棚のアメ玉をとって食べているのを見つけ、「だまって食べちゃダメよ」と注意したところ、ツカツカと母親がやってきて「お金を払えばいいでしょ」と店員さんを怒鳴り、にらみつけた、といひます。小さい子どもは何も知らないのでもあそれはそれでいいのですが、問題はそれとでした。しばらくたって店員さんは母親が子どもにこういっているのを聞きました。「ダメじゃないの。これからは見つからないようにやりなさい」と。さすがに啞然としたといひます。

極端な例でしょうが、母親の態度がこれでは子どもの先行きがどうなるか分ったものではありません。自分勝手もここまでくるとは……びっくりすると同時に全く暗い気持ちにさせられました。子どもは天使のように清らかで、きれいな白紙といってよいでしょう。親や教師はこの白紙に何を書くか、考

「子どもは親の背中を見て育つ」

えねばならぬと思います。子どもは何よりも身近な親や家族を見て育ってゆきます。親が真面目に働き、他人に思いやりを持ち、目標を立てて努力する姿は、子どもは必ず見ております。その反対の姿も同様に見て育ちます。何度かの反抗期もありますが、子どもが親に対しボールを投げかえしているといってもよいでしょう。これは自己確認のための成長過程にすぎません。親が何をいわなくても子どもが見習ってゆくことは絶対に真実です。前述のように土光さんは、自分のご息子には怒鳴ったことはないといっておられます。凡人はなかなかそうはゆきませんが、子どもが悪いことをすれば叱ったり、怒鳴ったりすることがあってもそれは当然でしょう。しかし子どもにやたらにグチをいうのは考えものです。親の権威というか、親に対する尊敬心が失なわれ、バカにするだけといった結果になりかねないからです。とくに母親が父親のことについてあれこれグチをいったり、非難するのは一番いけないといいます。「あんなお父さんみたいになってはいけませんよ」という言葉は子どもの心を深く傷つけるようです。非行少年少女の多くの場合、母親のたえざる父親批判が背景になっているといわれております。子どもは母親ばかりでなく父親の血をひいているのですから、親を信用しなくなって当然というわけで、気をつけるべきでしょう。

しつけに手を抜く親や教師

それはともかく、最近日本ではどうも親も教師も子どものしつけに手を抜いているようです。財団法人・日本青少年研究所（千石保所長）が6月13日発表した第2回日米小学生調査報告書があります。調査は、小学校4年生から6年生を対象に、日本では全国17校、2800余人、アメリカでは29校、2100余人を偏りのないように選んで今年1月までに同じ質問をしました。この結果について一番びっくりしたことは「あなたと同じ年ごろの子が絶対にしてはならないこと」という大項目で、日米の差があまりにも際立っていることです。このなかでまず「人のものを盗むこと」という質問に対し、「ハイ、絶対にいけないことです」と答えた子どもが日本では76.6%、一方でアメリ

カでは92.2%という結果がでました。これには、千石所長も「日本の子どもの23%が盗みを重い罪悪としてとらえていないことを示し、万引など遊び犯罪の横行と合わせてショックだ」といっております。また「うそをつくこと」に対し、絶対にいけないと答えた子どもが日本では68%、アメリカでは78%と10%の差があり、「タバコを吸うこと」に対する答えも日本が77%ハイ、アメリカは91%がハイとなっております。さらに「友だちとケンカすること」に、ハイ、いけませんと答えたのは、日本が41%、アメリカが62%。「約束を守らないこと」に、ハイ、いけませんと答えたのは日本69%、アメリカ73%。「両親の言いつけに従わない」は、絶対にいけないと答えたのは日本が66%、アメリカが78%、「先生のいうことに従わない」の質問にハイ、いけませんと答えたのは日本69%、アメリカ78%となっています。以上の項目でこれを罪悪視しない日本の子どもの方がアメリカの子どもよりも多いことが分かりました。良いことと悪いこととのけじめについて日本の子どもの方が意識が低いということでしょう。

この調査はまた、親や先生のしつけについて子どもがどう受けとめているか、も数字で示しています。親や教師が「ルール（規範）を守らせているか」という質問に子どもがどう答えているか、といいますが、まず母親について「母親がいつもルールを守らせる」というのが、日本は22%、アメリカは47%と2倍以上の差が出ました。ついで「かなり守らせる」というのが、日本31%、アメリカ21%でした。明らかに日本の母親の方がアメリカの母親よりも甘く、手を抜いています。また、担任教師について「教師がいつもルールを守らせる」のは、日本が38%なのに対し、アメリカは72%、やはりアメリカの先生の方がきびしい。「かなり守らせる」は日本が37%、アメリカ17%、「ときどき守らせる」が日本23%、アメリカ9%ですから教師も日本の方がしつけに手を抜いていることが分かります。千石所長は、こういう状況をさらに分析して、良い子悪い子を評価する基準は、日本では学校の成績にとりわけ強く重点がかかっている半面、アメリカでは社会的な正義に重点がかかっていると述べております。そして結論として「子どもに成績さえ良けれ

ば、という態度で接する父母や学校教育の影響が他の規範をあいまいにしている」と説明しています。

日本社会は激烈な競争社会で、この面ではアメリカ社会も同様であります。成績本位で他人は蹴落して何とも思わないという風潮があまりにも露骨になったと感じます。他人はどうなっても良い、どんなことをしても勝てばよいのだということでは一体日本のこんごはどうなるでしょうか。競争はフェアに、物事にルールのはじめをつけないでは、社会や国家の将来に非常な悪影響を与えることは自明の理であります。私たちはだれでも両親がいなければこの世に生きてきませんが、その両親も祖父母のおかげで生を受けています。そうして逆のぼってゆくと私どもの10代前の直接の祖先は1024人になります。それが25代前になるとなんと3355万4432人、31代前になると41億人以上になってしまいます。これを逆にいうと、例えば25代前の祖先からみて、それぞれ二人の子どもを生んだと仮定すれば、やはり3355万4432人の子孫ができていくわけでありまして、血を分けた同胞が今日それだけいるのであります。それを自分本位の立場から片っ端から疎外し、蹴落したら祖先はいかに悲しむか。民族文化の維持や、国家の発展などは期待できません。教育改革が叫ばれる今こそ、身近かな家庭から正しい教育を考え直す必要があります。(1984年7月記)

(参考文献)

- Anthony Sampson: Anatomy of Britain Today p.191~217, 1965, Hodder and Stoughton Ltd. London.
- Anthony Sampson: The Changing Anatomy of Britain p.113~128, 1982, Hodder and Stoughton Ltd. Sevenoaks.
- ディースターヴェーク・ロングマン著・中島文雄編: 英米制度・習慣事典 p.235~236, 1978, 秀文インターナショナル、東京。
- P. ミルワード著・舟川一彦訳: イギリス風物誌 p.116~125, 1983, 大修館書店、東京。

Children Copy from Their Parents - A Suggestion for Primary Education -

Yoshito Mano

In England, it has long been considered right and proper that children should be trained at home to be well-mannered, and that school is intended only to supplement this training. There are still some families in England who train their children in the old and strict Victorian way. Children watch their parents from morning until night, and more or less follow their way of life and behaviour. Needless to say, the parents thereby play an important role in the upbringing of the children.

English people pay great respect to individuality as a guiding principle in education, matriculation or employment. They develop children's ability by thoroughly observing and examining individual character and capacity. Children are given right and suitable education, either higher or vocational, based on this research.

However, the Eleven Plus Test, an epoch-making, nation-wide, selective examination, ended in vain. It was started in England in 1944, under the Butler Act. At the beginning, the test appeared to be an ideal method of finding children's ability and choosing suitable schools. However, it was not realistic. It is true that social and public thoughts are always reflected in the reformation of a school system; but since these thoughts tend to be many-sided and complex, reform should be performed in a practical manner and with great care.

In every society one can always find criteria or rules which have been followed for a long time—what we can call traditional values. And there are many countries which force people to maintain certain religious beliefs and creeds. It goes without saying that there is no country which has no laws imposed by those in authority, or morals which are kept by

the people themselves. At all times and places, the basis of primary education has been to make children follow these social rules and let them learn the basic knowledge and technology. In Japan, however, we must sadly observe that moral learning is put aside and too much is made of uniform intellectual training. Educational reform in Japan has become a topic of current debate, which suggest it is again time to think about the true purposes of education and reconsider what to do at home, the primary place of education.